

独歩といえば「武蔵野」が代表作です。明治中期の東京郊外の風景を、格調高い文体で描写し、今でも多くのファンがいます。作品では氏の日記を引用した部分が多く登場します。たとえば、

「そこで自分は材料不足のところから自分の日記を種にしてみたい。自分は（明治）二十九年の秋の初めから春の初めまで、渋谷村の小さな茅屋に住んでいた。自分がかの望みを起こしたのもその時のこと、また秋から冬の事のみを今書くというのもそのわけである。」とあります。更に、

「十一月十八日——「月を踏ふんで散歩す、青煙地を這い月光林に砕く」とあります。文学作品の中で、正確な年月日とその日に現れていた天体がはっきりと描かれているのは珍しいことです。私は「独歩が見た月」の正体を調べたくくなりました。

場所は武蔵國渋谷村（現在の東京都渋谷区付近）、時は明治29年（1896年）11月18日、「月を踏ふんで散歩す」とあり、「月光林に砕く」とありますから、真夜中ではなく夕暮れ直後でしょう。「月を踏ふんで」とは、月光または月光によってできた「影」を踏みながら歩く、という意味でしょう。いずれにしても、夜間の散歩には相応の光量が必要ですから満月前後と予想しました。

天文シミュレーションソフト「ステラナビゲーター」で、渋谷の正確な緯度経度、上記の日時を入力すると、果たして月齢13の月が表示されました。独歩は適当に空想で書いたのではなく、正しくその日の情景を描写していたとわかりました。森影（木々のシルエット）は私が描き加えたものです。執筆から130年近くも経って、自分が見た月を再現されるとは、独歩も夢にも思わなかったでしょう。

